

作東の文化

No.
39



作東文化協会

作東の文化

No.39



盆栽 青山 巖

平成25年10月

目次

巻頭言

心豊かに生きる……………内藤善晴……………1

特別寄稿

「マイナス」から「プラス」の人生へ

里見明……………3

ならぬことはならぬ……………岡田千茶……………4

所感寸言

歌謡曲あれこれ……………衣笠隼巳……………7

消える日本種……………井上健一……………8

随筆随想

老いのたわ言(三年寝太郎)……………吉政實夫……………11

おやじのわらじ……………井口祥子……………12

受け入れるということ……………原洋一……………13

努力家の父でした……………加藤美雪……………14

思い出のあれこれ……………田中一……………15

思い出のアルバム……………岩本全子……………16

歴史紀行

「記紀神話」は藤原不比等らの作

饒速日と神武東遷の学習が吉備古代史の究明のカギ

加藤芳英・春名倫子・安東奈穂子……………19

八咫の鏡のこと……………大谷照夫……………24

短文芸

詩

あゝ我が命蘇る……………坂部金治……………27

新しき街……………板垣恭子……………28

俳句

卒寿過ぎて……………加藤美雪……………29

慈雨……………岡本昌弘……………29

おりにふれ……………杉本幸子……………29

うつろひ……………春名はるを……………29

暑い夏……………真野雅子……………30

新茶……………山本靖子……………30

曾孫……………樽井悦子……………30

七難八苦……………山下照夫……………30

青田風……………井口祥子……………31

四季折々……………青山美和子……………31

大桜……………春名静山……………31

うまし国……………沖田はるみ……………31

四季……………福嶋多斐子……………32

笑顔……………香山秀子……………32

昼の月……………樽井清江……………32

春……………豊田絢子……………32

沙羅の花……………下山紀子……………33

友との便り……………森本久子……………33

題字
真野みよ子

川柳	哀愁	春名	33
	恐ろしや	山下	34
	折り返し	衣笠	34
	生きる	遠藤	34
	笑顔	山本	34
	八十年	太田	35
短歌	諦観	原洋一	35
	水の精	三浦	36
	夜の雨音	安東	36
	生くることの喜び	丘野	36
	かたくりの花	春名	36
	老いの気儘	山下	37
	廃校	福嶋	37
	シルバークー押す	加藤	37
	一直線	岩本	37
	人生訓	山下	38
	野菊	杉本	38
	旅先にて	豊田	38
	青春回想	松本	38
	史上初の大河川工事	加藤	39
	村の初夏	山下	39

卒寿の友よ	有元	39
優しき人々	横山	39
月と牛蛙	原田	40
鯉幟	新免	40
夫	宿野	40
母よ母	加百	40
穀雨	小林	41
鹿	新田	41
変はる景色	黒石	41
母	松井	41
農ガール	末宗	42
山里	森本	42
折々に	名部	42
早春	井上	43
やさしく問ふも	池田	43
朝	藤川	43
夏の山山	安西	43
命ありて	原幸	44
脳活とせむ	大内	44
淡路島へ	名部	44
生きてあれば	清田	44
曾孫	光井	45
折々に	藤本	45

平凡	内藤	45
春闘	福島	45
生きよ	浜田	46
天空の城	入矢	46
春を待つ	日下	46
祖父知らず	黒石	46
水の囁き	中川	47
浜に遊びて	長澤	47
遠い記憶	北村	47
家族の幸	角南	47
夫	角利	48
今日の日	加藤	48
ふる里よ	阿部	48
旅	船曳	48
われ老いにけり	坂井	49
有ると思ふなど	関内	49
身のめぐりに	森佳	49
グループ活動		
コール作東		51
双山囲碁クラブ		52
作東吟詠愛好会		53
平成24年度 作東文化協会事業報告		54
作東文化協会グループ紹介		57

平成24年度 作東文化協会決算報告	61
作東文化協会会則	62
平成25年度 作東文化協会会員・役員名簿	64
編集後記	75

表紙説明

題「森林の景」(生花)

この生け花は嵯峨御流のけしきいけ七景の一つとして苔むした倒木、豊かな水量、そして湖面に周りの木々と空が映し出され、天と地の融和した景観と、山湖の静寂さが伝わってくるような想いでいけました。

樽井清甫

「巻頭言」 心豊かに生きる

会長 内藤善晴

「文化協会会長など、私には相応ふさわしくないのでお断りしたい」と固辞したのだが、一も二もなく押し付けられたような形で、その任をお受けすることになってしまった。会員の皆様には誠に申し訳ない言いがただが、かくなる上は、なんとかつないでいくくらいの仕事はしなくてはなるまいと思っている。

私は、常々「心豊かにゆとりをもって生きたい」と願っている。ところが、現実にはその対極の、いわゆる「貧乏性」の道を歩まされているような気がしている。気がついてみると、ゆとりのある気分になれないで、一刻を惜しむように、せっせと百姓仕事などをしている。少々暑かろうが寒かろうが、荒廃の一途を辿る、先祖伝来の田畑をいじくっているのである。それに地域等でのいろいろな役が次々と

付け加えられてくると、おのずと忙しさが加わって、まるで忙しのが趣味かと錯覚させられるようになってしまうのである。いささか気遣いじみたような、忙しい百姓仕事の中で育てられた所為せいかもしれない。

大学での生活が始まった頃、美術サークルのオリエンテーションの会に参加してみたが、暇と金が許さないことに気づいて、入会を諦めたことがあった。もう六十年も昔の話だが、今考えてみると、ちょっと惜しまれる。そうして、子や孫たちには味わわせたくない体験だと思ふようになっていく。

「忙」という字は、「心を亡ぼす」と分解できる。まさに「心豊か」とは正反対のことばである。いつも忙しがっている自分だが、それでもやはり「心豊かに生きることを目指して生きたい」と思っている。

文化協会は、そういう思いの人たちの集まりでもあるのだ。

「マイナス」から「プラス」の人生へ

里見 明

(書家 特別顧問)

終戦後、父の郷里、岡山県北の現住地に復員。今でこそ都会人からは理想郷だとか、老後の楽園ともいわれるようになったが、当時は古代の原始生活に近かった。私にとっては何れも「ゼロ」からの出発であった。電気のないランブ生活、駅から四キロの急勾配の徒歩だけの山道。水道はなく、村の共同井戸から担桶かづによる水汲みは重労働の毎日。「ひねるとジャー」の現在生活とは想像もつかない山暮らしだった。

神戸生まれの神戸育ちの私にとっては、すべてが「マイナス」の生活環境だったといえるが、その「マイナス」から脱却し、その「マイナス」があったからこそ、半世紀以上の今日があり、「プラス」に転向することができたと思っている。

①ランブ生活だったから、ランブのあたりで新聞紙に墨液で書くことを余儀なくされ、太字を書くことからが

出発点となり、筆の道にのめりこむことができたといえる。当時、江見に在住の書家阿部雲魚先生の門をたたき、夜遅くお邪魔したこともたびたび…。雪の夜は地下たばに「かい縄」を巻きつけて通ったこともなつかしい思い出。

②現在の道路がつくまでは、やっと歩ける程度のけもの道に近い尾根伝いの道。教員最初の四年間、榎原小学校へは地下たばで通勤、続いて土居小学校へは自転車、五年間、赤土とほこりの悪路を。そのおかげで一日二時間の往復は「考えること」に集中できたわけである。「往」にはその日の計画ができ、「復」には反省が可能だった。時には、へたな短歌や俳句を作ることまでできた。

③教員生活は、定年六年前で退職したことも当時の社会情勢から見れば「マイナス」だったかも知れないが…。神戸の三宮カタオカホテルでの個展を皮切りに、中国

西安市美術画廊での個展・北京市中国美術館での親娘

展。シンガポールでのロータリークラブよりの招待展、さらに六年後シンガポール日本人会館での白雲美術展等々。無名の私が無謀ともいえる書展を開くことができたのは、私をとり囲む皆さんの支えがあったからこそである。

④教員免許の関係で、小学校教員の現職中に四十代になって東京の大学に学び、中、高校に勤務できたこと。特に大学では、年齢差のない学界でも有名な教授連との個人的な交流ができ、直接指導を受けることができた

のは、私の人生の中で大きなプラスだったといえる。

⑤私の小・中学校時代が国際色豊かな神戸だったため、クラスメートにも台湾、韓国、アメリカの方もあり、今でもプラス的存在になっている。

さて、私の人生をふり返ってみると、数多くの人との出会いが「マイナス」を「プラス」へと自然に移行したといえる。文化協会の皆さんのお力添えがあったからこそと感謝、感謝。

(協会の皆様のご多幸と、会の益々のご発展を祈念して擱筆。)

ならぬことはならぬ

岡田 千茶

(朝日新聞岡山柳壇選者)

今年一月十七日付けの朝日新聞「声」欄に「仕の掟」美化してはならぬ、という山口県の六十五歳、男性の投書が載っていた。

NHKの大河ドラマ「八重の桜」を見たが、会津藩の少年たちの「ならぬことはならぬ」という言葉に何ともいえない後味の悪さが残った、という書き出しで、

福島県を舞台にした数多い作品の中から、あえてこ

れを選んだ意図は何だろう。

幕末、傑出した軍事力を有していたのが会津藩であり、同藩を教育面で支えたのが「仕」だった。「仕」は上級武士の男子十人程度で構成され、長幼の序や卑劣な行為を戒める「仕の掟」が定められていた。つまり幼少期から藩主への絶対服従をたたき込んだ洗脳教育だった。

この精神は白虎隊の悲劇、西南戦争での残酷な誘因となったとも言われ、後にこれを範として、東条元首相が敵の捕虜となることを卑怯で恥とする戦陣訓を作り、多くの兵士が死を強要される原因となった。

「什の掟」は現実を直視せず、ひたすら主君に忠節を尽くすよう仕向ける封建制の遺物だ。軍国教育の怖さを知らせる反面教師として紹介するのならともかく、間違っても美化してはならない。

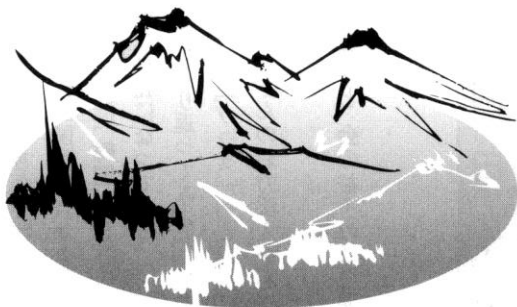
要旨は以上のように書かれている。

先んず「八重の桜」は、のちに同志社大学を創設した新島襄の妻となる会津藩の武士の娘で、幕末のジャンヌ・ダルクと言われた山本八重の生涯を描くもので、福島の復興を願う意図があったとしても、それを主題とするものではない、と理解している。

「什の掟」は、一度テレビで見ただけだが、主君への忠節をたたき込んだとしても、それは江戸時代としては当然のことで、十箇条のひとつひとつが、決まりを守ることなど、道徳的にも、法律的にも、現代的にも「ならぬこと」はならぬは正しいことで、どのように考えるかは個人の自由で、それをとやかく言うつもりはないが、投稿者の言う後味の悪さは私には理解できない。

東条元首相が白虎隊の悲劇を範として戦陣訓を作ったというが、何を根拠にそれを主張されるのだろうか。

「什の掟」は現実を直視せず、主君への忠節を仕向ける封建制の遺物だとあるが、それはあの時代の現実に即して定められたもので、現実を直視してのものにはかならない。繰り返しになるが、投稿者のいう間違っても美化してはならぬとはどういうことだろう。美化するも何も、「ならぬこととはならぬ」は当然のことだと思いが、如何…。



所感寸云

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



写真 圓 東 秀 章

歌謡曲あれこれ

衣笠 隼 巳

昔むかしと言っても明治時代の話、文明開化を急ぐあまり政府は一般庶民の声には耳を貸さなかつたと聞く。中でも政治経済について民衆を煽るような演説は厳しく抑えられたらしい。それなら、歌を唄うのは文句あるまいと街頭でバイオリンを弾きながら、平素の不平不満に節を付けて民衆に語りかけたのが演歌の始まりという。その後、任侠や色恋の歌も加わり、ウグイス芸者と言われた小唄勝太郎・美ち奴・音丸といった美声の持主の歌がヒットすると、それまで遠慮していた一般家庭の婦女子も次第に口ずさむようになっていった。時代も変わり、大正・昭和となつ

たが、日本は相変わらず近隣諸国と戦火を交えていた。だが、日清・日露戦争と苦戦はしても連戦連勝、下駄の音さえカッタカッタと鳴っていた。そして遂に世界を相手に戦を始めたが、相手がどこであれ、日本は神州、負けるはずがないと思っていたのに急に雲行きが怪しくなった。歌においても歌謡曲は一切駄目、総て軍歌に限る——と。穏やかでないお触れである。そうした中でも意外な歌が意外な所でヒットした例もある。前線へ送られて来た兵士が口ずさんだ高峰三枝子の「湖畔の宿」である。「山の淋しい湖に……。フレーズからして戦意高揚には無縁の曲が隊内で瞬く

間に拡がり、戦地から逆に内地へ伝わり、いまだに唄われるのも不思議な話だ。

戦争も終わり、歌も様変わり。「帰り船」「異国の丘」「湯ノ町エレジー」が流行った頃、天才少女といわれた美空ひばりが現れた。独特の声と節回しで次々とヒットを飛ばし、ひばりの曲に酔いしれて青春を過ごした人も多かるうし、昭和と共に去っていった彼女の人気は衰えることはない。

当時の人気番組に紅白歌合戦があった。大晦日、夕食もそこそこにテレビにかじりついて見たが、最近は今見ない。歌手であれば一度は上りたい桧舞台、多くの歌手の卵が辛いた積みやキャンペーンに耐えて頑張っているのに、一部の歌手だけ出し、

他のメンバーは派手な衣装に身を包み、舞台狭しと跳ね回るフェスティバルに変わったからです。企画する側からすれば老人が好む演歌より若者のハートを掴んでおく方が賢明と見るのは当然だ。

カラオケもテープからレーザーへ、そして通信と発展して来たが、最近では頭打ちで少し陰りが見えはじめたような気がする。演歌が若者に受けない限り、先細りは明らかだ。でも、たとえ廃れていこうと、歌を心の友

として下手くそなりに声を出せば、ひよつとして健康とボケ防止の役にたつのかも知れない。

…演歌節

歌えば腰も皺も伸び…。



消える日本種

井上 健一

先日、テレビを見ていた時に、仰天するようなニュースを流していた。

「台湾シジミの異常な繁殖で、日本古

来のシジミが絶滅する可能性がある。」という話だった。これは一個の雄の台湾シジミが日本シジミの雌と

結合すれば、その子は全て台湾シジミになってしまうということだった。恐ろしい話である。

このように繁殖力が強く、日本古来の種を破滅させる恐れのある外来種を危険外来種というようだ。

日本には他の国にはない固有種が沢山あったが、外来種の進出や、農薬等の影響でかなりの固有種が姿を消している。私が子どもの頃によく見ていたものや触れていたものですら、姿を消してしまった。

では台湾シジミのような危険な外来種が、どのようにして日本に入り込んだのかを説明しよう。

加工用に輸入されたものが工場内の用水路に落ち込み、外に逃げ出してしまったと考えられる。

植物では「セイタカアワダチソウ」

がはびこり、キキョウや、オミナエシ
等が殆ど見ることができなくなつて
しまった。

植物の変化は外来種の影響だけで
はなく、根絶やしにする除草剤の影
響でもあると、考えられる。

多くの外来種が、日本の固有種を
抑えてはびこるのは、日本の環境が、
世界でも優れているからであると思
う。

十数年前には外来種の松食い虫の
被害で多くの赤松が犠牲になった。

日本の松食い虫も、被害をもたらす
が、ここまでは、ひどくはない。松食
い虫の被害を食い止めるために大量
の農薬が散布された。このように連
鎖的な影響は計り知れないものがあ
る。

外来種の植物や動物は、非常に強

い繁殖力を持っている。言い換えれ
ば多くの外来種が日本の環境に適合
しやすいということになると思う。

今、我々が直面している大きな問
題は、狂牛病や鳥インフルエンザの
ように、外来種が、生活環境を破壊し
はじめていることである。今後の早
急な対策が望まれる。



書道 草 苺 完 治

随筆随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



ちぎり絵 山 満寿子

老いのたわ言 (三年寝太郎)

吉 政 實 夫

昔々、美作の国建国よりまだ昔、那岐山に巨人で力持ちの太郎という人がおり、美作一円を治める領主であった。今でいう土木技術者で、各地にため池を作り、河川改修を行い、井堰、用水路を改良して農地開発に心魂を尽くした人で、大男で、一里を三步で歩いた人だと言いつい伝えがある。

或る時、九州方面への旅の途中、宇佐の八幡様へお参りしたところ、宮司さんから「太郎、良いところへ来た。丁度、土居八幡様への贈り物があるから届けてほしい。ついでに社殿を二社、天秤棒に荷造りしているの、どこか信仰の深い所に祭ってほしい」と頼まれた。各地を検分しながら

帰り、贈り物を届けた。

丁度、田植えも終わり、白鷺やツバメが飛び交い、蛙の声もひとしきり。担いで帰った社殿をそとと青田の中におろし、宮司さんと旅の道中話に花を咲かせているうちに、旅の疲れが出てきて、白水の、ふかん祠で一休み、とうとう三年三月寝たそうなの。

目が覚めて、いざ帰ろうと天秤棒を担ごうとして踏ん張ってみたが動かず、よく見ると、それが立派な社殿になり、木が生えて山となり、これが角南神社と竹田神社だそうなの。

その時踏ん張った足跡が土居から角南へ越す付近と、土居大内田んぼの真ん中にあり、今から二十四〜五

年前に農地の構造改革が始まり、関係者が集まり、相談の結果、それを取り去るべく宮司さんに相談したところ、遺跡地鎮祭を別に祀り、那岐山の本宮に返してもらえろということを取り去ってしまいました。

遺跡は、十五歩、二十歩の小さな田んぼで神田と呼ばれており、「女は近づけず、付近へ小便などしてはならず」と言い伝えられた。

当時の立会人は一人も居らず、遺跡をなくした責任もあり、これを土居民話として永く語り残すべきか皆様のご意見を聞きたい。

角南神社も竹田神社も田んぼの中にぽっかり浮かんだようにあります。



おやじのわらじ

井 口 祥 子

五月十八日に田植えをしてから、二ヶ月が経ったこの頃、稲は、すくすく大きくなり、丈を伸ばし、色は青々と元氣いっぱい、株の数も一にぎりにできない位に育っている。

夫は、青田の広がる田の畦を毎日、朝早く見てまわることを日課としている。私はそれを「おやじのわらじ」と呼んでいる。わらじをはいて旅に出る訳ではないが、わらじでなく、長靴をはいて田んぼへ出かけて行く。

朝のみでなく、夕方田んぼを見てまわっている。稲の生長の様子、田の水加減等々、見る所はいっぱいある。

苗を植えて間がない頃、からすや

鷺が田んぼに入ってきて来て、早苗を踏んづけているとか、田に高低があり、水が行き渡ってないとか、最近では、田の地面が割れる位に何日間か干してやり、ガス抜きをするとか、田の草を取ってやるとか、稲の生長に合わせて世話をしている。

畦草も少し伸びると刈っている。まるで、子育てのように、稲がかわいくつたままならないように見える。

朝、散歩している人と言葉をかわしている声も時々聞こえて来る。

朝食の用意ができて帰らないので呼びに行くと、水戸口で鋤を使っていたり、畦から草を引いたりとか、時間をかけてがんばっている。

仕事着は、朝の見まわりだけでも汗だくになっている。だから、洗濯は一度だけでは到底すまない。

稲の生長を「おやじのわらじ」で、毎日見守り、秋のたわわに稔る稲刈りができる日を楽しみに待っている。



受け入れるということ

原 洋一

夕食を済ませた後、気になって愛犬の様子を見に外に出てみると、既に息はなかった。

ひと月ほど前から、あれほど好きだった散歩にも洪々ついて来るようになり、食欲が落ち出した。一週間ほど前からは全く食事を受け付けなくなっていた。

享年、十五歳の天寿を全うしたとは思っているが、胸が締め付けられる思いがする。

今では、毎朝、愛犬の死を自分自身に言い聞かせているありさまである。最近では親しかった友や身内を失う経験もしているが、一緒に田舎暮らしを始めたこの犬は、一番身近な存

在だっただけに、たかが犬ということにはならぬ喪失感を感じている。

古希を過ぎて、色々と失うものが増えてきた。自分の体の老化でも、ここ数年は特に気になる。病氣もせず

に元気が取り柄だっただけに体力の衰えは不甲斐ない思いである。

元来、人間は「生病老死」といわれるように、生まれてから死ぬまで、様々な悲しみを背負って、生きて行かねばならないものなのかもしれない。特に、老いに向かうこれからは、失うもの、できなくなることが多くなる。もがく時期はあっても、否が応でもそれを「受け入れ」て生きて行かねばならない。

人間も自然の一部として、命ははぐくみ、全うするものということ、十五年の田舎暮らしで学んだはずだ。

弱い人間であるからこそ、その時その時の自分自身を受け入れ、受け入れることで自分が成長し、それが喜びや安らぎになれば言うことはないのだが……

住み慣れた家に住み、見なれた土地を散歩し、時々近所の人たちや友達と言葉を交わし、体力が衰えることには逆らえないにしても、重い病氣にかからないように注意し、なるべく妻や子どもたちに迷惑をかけないよう、静かに暮らしながら自分の意志で、自分らしく人生を全うしたいものだと思う近頃である。

散歩の相手をなくした今、独りで歩くのは淋しい。次の犬を飼おうか

と妻に相談してみたら、「犬より先に死んだら、犬が可哀想だから、よしなさい」と言われてしまった。これも、「受け入れ」ようと思っている。



努力家の父でした

加藤 美雪

昭和二十年八月十五日に大東亜戦争が終戦いたし、故郷川北に帰りました。以来、卒寿を過ぎまして、随分暮らしも変わり、長生きをしたものだと思います。父母も米寿、白寿と長生きいたしました。

父は英田郡の小学校に勤め、最後、豊田村小学校より大阪府立茨木高等女学校へ、昭和元年に転勤いたしました。私が五歳でした。学校の夏休みには曾祖母、祖父、叔父母の住んでい

る川北に帰り、唱歌にありますよう、「やがては楽しい夏休み、叔父上訪わん、叔母上訪わん、風も清き青田の村……」の通りでした。

戦争が起こり、若い人々を戦地へ送り、そのことを思えば、どんなことをしても苦にはなりませんでした。

私も昭和十八年十二月に齒科医の方と結婚して、大阪府富田町の自宅の前のお寺へ学童が疎開して、父母を離れ、賑やかに生活をしておりま

した。私達も両親と主人の妹の主人が出征され、子どもさん二人疎開され、同居しておりました。

配給物等、部落別に配り、防空壕に入りつづけましたが、八月十五日に終戦となりました。主人は高槻市の病院で入院中で、私の父も詰め襟姿にゲートルを巻き、見舞に来てくれましたが、八月十九日に死去いたしました。二重の悲しみでした。

父も故郷へ帰ることを決心いたしました。教育生活に終止符を打ち、大阪府立茨木高等女学校を退職して農業に従事することを決心しました。

江見農業組合長として七年間勤務させて頂き、森林組合、教育委員会、町議会議員、そして作東町長まで、身にあまる職につかさせて頂きました。私も親戚関係の人がシンガポールよ

り復員して帰還され、養子縁組として迎え、田畑は勿論、森林の方も椎茸、割木、数えれば仕事は次々とでき、普及所も丁度、川北に事務所がおかれ、色々と教えて頂き、子どもも三人できまして、戦後の生活になれ、活躍いたしました。

幼稚園から女学校、父は花嫁修業まで兵庫県の園田家庭学園まで通い、すべて色々と手につけてくれました。

思い出のあれこれ

田中 一

入会して二十五年になりました。

「作東の文化」は多く学ばせていただきました。同年の友達と会って「お元気ですか?」「まあ、ぼちぼちです。」というのが最も多い。今、何をすべき

ので、お陰様で満九十二歳を迎えました。家族は息子夫婦、孫夫婦、曾孫二人、私と、七人家族です。

私は二本杖につき、シルバーカーで動いております。作東文化編集委員の皆様には大変お世話さまになりました。感謝いたしております。

故郷に帰りて住むもよきことか
川魚隠れ場所も無くなりし

か考えるようになりました。

急速に進む長寿社会の中で老人クラブの有用性を認められるよう、お互いの活動の中で輪を広げて行きたいと思っております。

心身の健康が第一と考え、足腰の

老朽化防止が第一と考え、毎日が時々になりましたが、歩くことに努めております。ウォーキング往復4kmを行っております。お互いの活動の中で輪を広げていきたいと思えます。よろしく願います。一人では心細くても仲間と一緒になら心強いです。

ところで確定申告に医療費控除のない方が多いのには驚きです。

平成二十三年に高齢者に多い白内障の手術を姫路に入院し、手術をし、平成二十四年にビタミンB₂欠乏症で赤穂の病院で一ヶ月通院して点滴を三回し、原田内科で注射を半年間繰り返し受け、完全に回復し、ほっとしております。

今はマイペースでポチポチやっております。

おります。

八十歳から体力の限界を感じるようになりました。体重も六十kgから四十六kgに落ちました。身が軽く感じるようになりました。



思い出のアルバム

岩本全子

「いつのことだか思い出してごらん、あんなこと、こんなこと、あったでしょ」これは、「思い出のアルバム」の冒頭の歌詞です。

もう五十年も遡りますが、大阪で私が勤めていた幼稚園の卒園式では先生が語りかけ、園児が答えるように可愛らしく歌っていました。あの子どもたちも五十五歳位にはなっています。どうしているかなと、この春

先はいつも昔を思い出しては元気をいただいています。

短大は出たものの、まだ未熟者で初めての大阪の幼稚園勤務とあって一から出直しました。結婚と仕事で特訓の毎日でした。こちらでは見たこともないエレクトーンも弾けなくてはいけないと言われ、大変な毎日でした。でも元来、私は都会に憧れて

いましたので、主人の力強い助けにより私の人生は軌道に乗りあげ、またとなない人生経験をしました。

登園はすべてバスでしたので自分のクラスのコースをよく知るため、送迎バスにも乗り、笛を吹いて阪奈道路を横切るのですが、よくできなので休日に主人の車で山の方へ行つて練習していました。気持ちよくつきあつてくださったこと、今も覚えております。「もつと手を大きく横に出してー」とか「もつと力強く笛を吹いて」と急所を言ってくれていました。

主人のお陰でバスも人並みになり、私はずーと年長組を担当してました。

特に年長組の晴れ姿は運動会の入場行進です。暑い中、毎日毎日練習し

た鼓笛隊のことを私は忘れません。
あの頃はスカートも短く、私もキュ
ロットでした。

今、ここに運動会の写真がありま
す。主人も丈夫だった若い頃を思い
出しています。写真はいいですね。幸
福だった頃をじっとふりかえり、将
来に向って勇気と生きる喜びを生み
出してくれます。

私はいつも冬の間、写真の整理を
します。きれいに説明を書いたり、色
紙でその雰囲気を作り、説明してい
きます。

去年は妹達が飛行機に乗せてくれ
ました。日光方面へ、岡山空港発―羽
田行き十二時二十分発！素敵な一時
間でした。次は世界の空へと楽しみ
が増えました。姉妹はいいものです
ね。いつもありがとうございます。

今年もよい一ページができました。
来年ももっともつとよいアルバムが
できますように祈りつつ……。



歴史紀行

大きなできごと

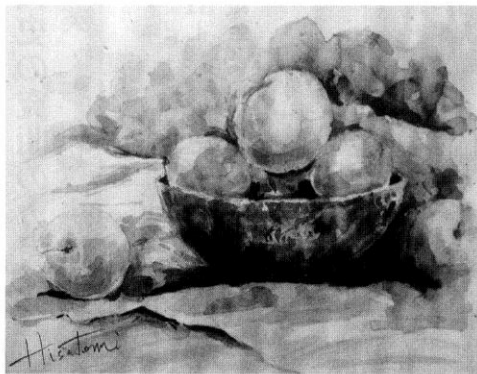
些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなつて

伝えよう



油絵 岩崎久富

『記紀神話』は藤原不比等らの作
饒速日と神武東遷の学習が吉備古代史の究明のカギ

加藤芳英・春名倫子・安東奈穂子

山口和利「古代伯耆研究による邪鳥台国解謎」(昭和六〇年)を津山の古本屋で入手。

その年表に「西暦二二〇年頃、出雲にスサノオ。伯耆にヒナドリ出生す。」二五〇年頃、出雲にニギハヤヒ、伯耆にオオナムチ、日向にヒミコ出生す。」と記載。

右の五王(神)の出生は二世紀。(今より約一九〇〇年前のこと)

「古事記」「日本書紀」は約一三〇〇年前の奈良時代の作品。

一九〇〇年マイナス一三〇〇年。

『凡そ六〇〇年』曖昧模糊の古代神話期間。七・八世紀の「記紀」撰上

により、古代史の改竄、スサノオ・ニギハヤヒ時代の隠蔽・創作が、ほしのままになされ、悪影響が現在に至っても残されている。

汐見坂剛

「吉備王国伝説・吉備の鬼武者」

(平成一三年・講談社出版サービセンター)

「大和政権成立後まもなくでした。

二十三代吉備王国、仁凌王は四歳の娘咲岐心姫をやがて天皇の妃とする約束をかわして大和に送ったのです。」

「咲岐心姫は名を国香姫と改め、第

七代孝靈天皇の妃になったのです。

孝靈天皇との間に二男二女が生まれ、長男が後の山陽道將軍となり吉備津神社の祭神となった吉備津彦なんです。」

(註・初代神武は三世紀頃。六代孝靈は四世紀初。十代崇神天皇は四世紀中頃。応神・仁徳は五世紀前葉。継体は六世紀前葉。)

(孝靈天皇と国香姫の子に倭迹迹

日百襲姫(吉備津彦の姉)

三世紀初の築造とされた美作市

「杉原弥生墳丘墓」(方墳但馬系や倉敷市「楯築弥生墳丘墓」(神武の頃)の

「吉備王国」とスサノオの「出雲王国」、

ヒミコの「日向王国」が西日本で並んでいた。

原田常治

「古代日本正史」

(昭和五一年・主婦と生活社発行) ※取り寄せ可。

〇三―三八一五―七一六一

「記紀以前の資料による古代研究の報告記録」とする原田氏は「古代日本正史」の帯封に左の通り印刷された。簡潔だから紹介する。

①日本建国の祖は素佐之男尊であった。

②今の天照大神は素佐之男尊の現地妻であった。

③記紀以前の天照大神は男性であった。

④神武天皇は婿養子であった。

⑤邪馬台国は宮崎県西都市であった。
⑥日本書紀の八割以上が嘘であった。
⑦古事記は五割以上が嘘だった。(学校で教えられた内容と雲泥の差。一つの参考にも)

梅原 猛・竹内 均

「古代史への挑戦」(昭和五六年)

梅原 猛

「学問のすすめ」(昭和五四年)

京大教授の上山春平氏(故人)との共同研究で、「記紀」の撰上主体は、藤原鎌足の次男・藤原不比等と特定。

梅原氏は「記紀」の撰集は元明天皇と藤原不比等の政治計画の書である。」と明記されている。

「学問のすすめ」の中で、「戦前の小学校教科書で特に強調された神話は高天原よりの「天孫降臨」アマテラ

スが皇位を孫のニギ尊に譲った神話であった。」と強調。

藤原京から平城京への遷都時代の「天孫降臨二例」を挙げている。(不比等が黒幕)

①持統女帝が草壁皇子死後、幼孫文武の成長を待つて皇位を譲った話。

②草壁の妃・元明女帝が即位して孫の首(オビト)皇子(後の聖武帝)に皇位を譲渡した話。

大和政権の「日本国」名の初出文書は天武帝の六六三年。

持統政権は、

六九一年「大三輪以下一八氏の先祖の纂記を作らせる。」

六九二年「三輪高市麻呂、天皇伊勢行幸を練言すれども天皇決行。」

七一六年「今の出雲大社(祭神大國主)を建造。」

元明天皇・不比等は、七〇一年の

「大宝律令」完成で、全国六〇余の「律令・令制国」(今の県に当たる)を日本の下部地方組織として設置し、国司・郡司を任命して、日本の中央集権・官僚国家建設を企図した。(不比等は七二〇年没、元明は七二二年没)

ここに至ると、「美作国建国一三〇〇年」と実行委員会と行政の離し立ってに簡略ながら触れざるを得ない。

和銅六年(七一三年)「丹後・美作・大隈国を置く」(続日本紀)と明記されているのに、「誕生」とされているとか「建国」に改竄・スリ変えを行っている、日本国が律令国を置いたのにもかかわらず「建国」「建国」の押し付けを続行しているが、日本史の歪曲。観光を利用して行う一種の精

神公害のバラマキである。

「建国記念日」のごとく、「建国」は日本国に使用するもの。

百年前の「美作国創置二二〇〇年」記念碑が中山神社に残っている。百年後のためにも注意を喚起しておくのが市民の義務である。

「美作国一三〇〇年」「美作国創置(建)一三〇〇年」で十分いける。今からでも張本人たちは改めよ。

特集本

「邪馬台国の正体」

(平成一三年七月・徳間書店)

この中で安本美典氏は、生涯研究と、情報科学に立って「邪馬台国は九・九・九州にあつた。」(福岡県朝倉市〔旧甘木市〕)と論説。

更に「箸墓ヒミコの墓説」の虚妄

をついでいる。

(註・箸墓は崇神の伯母のヤマトモソヒメ説が有力)

大野七三

「先代旧事本紀訓註」(平成一三年)

「皇祖神・饒速日大神の復権」

「日本国始め・饒速日大神の東遷」

(平成一二年・何れも批評社発行)

※取り寄せ可。

☎〇三―三八―三―六三四四

大野七三氏は「先代旧事本紀普及会会長」として、左のごとく「二世紀頃の日本」を鳥瞰された。

「素佐之男尊が出雲国を創建。さらに九州遠征、宮崎県西都市に政庁を置き、魏志倭人伝の卑弥呼女王(天照大神)を妃として、南九州を統治し、北九州は第五子の大歳命(大年神・

後の饒速日尊)に統治を委任。」

「スサノオとヒミコの間には三女神誕生(市杵島姫・瑞津姫・田心姫)宗像(三女神)」

「ヒミコは高木神と共に、九州全域の連合国(魂志倭人伝の邪馬臺国)を作る。」

「ニギハヤヒの大和への東遷」

―大野七三氏の説

ニギハヤヒは北九州より三二人の従者(神)と二五部の物部軍団などを従えて大和に東遷。

北九州―松山市三津浜―大三島(その後、仁徳天皇の頃に大山祇神社が遷座)―香川県多度津(金比羅宮へも)―兵庫県姫路付近―高槻市三島江(三島鴨社・首長溝昨耳の娘玉櫛姫と結婚された伝承あり)

大和東遷後、磯城(鳥見)の豪族ナ

ガスネヒコを服従させて、その妹三炊姫を妃として宇摩志麻治と伊須氣余理比売(神武天皇の皇后)が誕生。

ニギハヤヒは纏向(桜井市)を王都として、日本全国統一の基礎を作る。

ニギハヤヒの死後、神武天皇が東遷され、ニギハヤヒの娘伊須氣余理比売と結婚。(ニギハヤヒの養子)

ニギハヤヒの御子宇摩志麻治命より、命の統治権を禅譲され、大和朝廷の初代天皇となられた。(先代旧事紀は九世紀の物部氏系)

「ニギハヤヒの大和への東遷」

―山口和利氏の説

山口和利

「古代伯耆研究による邪馬台国解謎」

(昭和六〇年・二二七頁の本)

これには、左のごとく描かれた。

(東遷の部)

・一七五年頃、スサノオは、宇佐で

「西州八岐国」を樹立し、ニギハヤヒに大和東遷を命ず。

・一八〇年にナガスネヒコ降伏、三輪山麓に進出し、ニギハヤヒが「大八岐国」を樹立する。

・一八五年頃、スサノオは出雲国熊野で死去。オオナムチ(大己貴)がスサノオを継承して「八岐大王」となった。

〔八六〇余の陸路の騎馬軍団

(蒜山は軍馬養成基地)〕

— 出発

真庭(八岐国主都、福田の大宮神社、美甘一带) — 勝山 — 津山(中山神社) — 佐用 — 龍野(粒座天照神社) — 姫路(大年神社) — 東灘区岡本(保久良神社) — 大和へ。

吉備基地(註・吉備津・児島湾あたりか)発進の水軍団は、瀬戸内海を東進。揖保川河口付近で、陸行本隊と合流しつつ西部大阪湾に布陣(東灘区・住吉神社)。

(以後の年表は省略)

大野七三氏と山口利和氏の東遷経路を尊重しつつ、学習を重ねたい。

美作・伯耆の神社祭神、地名、郷土史等で分析を続けたい。



八咫の鏡のこと

大谷照夫

土居の天王谷から発掘された鏡のことですが、この鏡について江見の田中千秋さんの著述によれば八咫の「咫」というのは古代の計測の単位で人差し指の真ん中の節と節の長さ(どちらの節とも書いてないが、推察するに先の節)で、これも説明はないが、古代の八咫は六咫のことで六を掛けると二一糶となり、発掘された鏡の寸法と大体合致すると解説してあった。ああ、そういうことかと、その時は別に不審に思うこともなかった。

その後、私は行きつけのある書店で三種の神器という本を見つけて読んでみたくなり、八咫の鏡のことを

読むことになった。

この本によれば、「咫」というのは、やはり計測の単位には違いはないが、咫は一八糶で、八咫、すなわち一八糶に八を乗じた一四四糶の周囲を持つた鏡で、直径四八糶の大鏡ということであった。また神器特定の呼称ではなく、この規格にあった鏡の総称で、他にも幾つかあるということである。

両者の説明には大きな相違ができた。そこで複数の辞書で調べてみた。

ある辞典には掌の下端から中指の先端までの長さ、またある辞典では親指と中指を開いた長さ、また、一説には親指と人差し指を開いた長さとして

あったが、大略一八糶というのが合っているような気がする。とすると田中千秋さんの解説が気になる。田中さんとして、なにか根拠があつてのことであろうが、わからない。

古代の八咫は六咫のことであるなどと言えるものでもなからう。宿題としておきたい。

鏡の大きさについては三種の神器の筆者も内宮に於ける鏡の容器について、四十八糶の大鏡が入る容器の記録が次の時には九寸以下のものしか納まらない箱の記述を不審に思うと書いており、現物を誰も見た者はなく、即位に及ぶ天皇でさえ見ることもが許されぬという不可思議な代物であるので、大きさについても全く不明である。

神器の本物である草薙の剣は熱田

神宮に、八咫の鏡は内宮にと奉祭されており、勾玉以外はレプリカということがあるが、それでも私が不審に思うのは発掘された鏡である。

この鏡は塵余八咫の鏡といって宮中で何度も火災があり、焼け残ったものということであるが、このような片ペラな姿となった鏡が重宝されるものだろうか。宮中では破損とか損壊の度に修理調達が行われてきたはずが、見る影もない片ペラの姿で伝えられてきたことが、どうも私にはよくわからない。



写真 安田 隆

短 文 芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短芸の力
伝統文化の力



日本画 小坂田 初子

詩



生花 樽 井 悦 甫

あ、我が命蘇るよみがえ

坂部 金治

山又山に包まれて
 源流東に山家川
 西に流るる櫛田川
 初秋の風が頬撫でる
 畑の起耕と出すテーラ
 思はず杭に足取らる
 悪魔と化して牙を剥く
 倒れし我が身に襲い来て
 左足の肉を削り取り
 浮き出て目を射る白骨に
 助けを呼びし声三度
 遂に意識を失ひて
 やつと気付けばベッドの上に横たえり
 顔を覆いし治療器具
 点滴の昼夜に渡る幾日ぞ
 無き左足リンリンと痛さ伝いし指の先
 死境を越えし此の命
 あ、我が命蘇る蘇る

平成二十四年八月二十八日、事故を起す
 平成二十五年四月、当時を偲びて

新しき街

板垣 恭子

一、取りたくなくても 寄せる年
 しかたがないんだ 生きる世は
 元気で行くようよ あらたな世紀
 夜空の星が 輝くよ
 夜空の星が 輝くよ
 夜空の星が 輝くよ
 はげますように 輝くよ

二、静かに明けた 作東の
 さみしく見ゆる 広い道
 元気を出そうよ あらたな街を
 夜空の星が 輝くよ
 夜空の星が 輝くよ
 夜空の星が 輝くよ
 はげますように 輝くよ

三、人に合わずに 今日も暮れ
 昔をしのぶか 切なきに
 肩の重みに 真冬の寒さ
 明日も元気で がんばろう
 夜空の星が 輝くよ
 はげますように 輝くよ

俳句



押絵 唐内 治美

卒寿過ぎて

加藤美雪

卒寿過ぎ杖つき日の出拝みけり
露の臺早や出しかと汁に浮き
梅の花匂い起こせと春またる
柏餅葉の風味よく抹茶飲み
空蟬や背割りいつの間飛びたちぬ

おりにふれ

杉本幸子(土居)

陽だまりの野良猫の伸び春隣り
青白き街灯ともり秋暮るる
剪定の缺の音冴え秋深む
老二人はずむ話しや菊日和
長居して釣瓶落しの路急ぐ

慈雨

岡本昌弘

慈雨うたれ千の螢や山家川
横吹に笹波立ちて雨を呼ぶ
仁比押して戦いの糧夏椿

うつろひ

春名はるを

水神の祠荒れたり雲降る
梅林やそこだけ色の走りをり
菜の花の景を背にして電車ゆく
新茶いれ鳥の声きく峡の里
雲の峰下に広がる大砂丘

暑い夏

真野雅子

十年の節目や独居黄水仙
喜寿の来て生きる重さや合歡の花
指折りて待つ団欒や盆休み
義父母逝き夫に両親盆提灯
赤とんぼ行き止りなき空泳ぐ

曾孫

樽井悦子

梅香り子等の声聞く山の道
卒園の答辞風呂にて声高し
こぶし咲くあの丘登りて里を見る
仕事おえ新茶で語る土手の上
曾孫達落葉背にして大の字に

新茶

山本靖子

刻々と昇る朝日に初祈願
春眠し本を開いてうとうと
待ち侘びて届く香りの新茶かな
瀬音聞き足湯から見ることのほり
同窓会話の尽きぬ京の秋

七難八苦

山下照夫

水ばししょう鹿好物か平らげり
烏めは我家のコーン台無しに
猪やさつまいも喰い稲までも
月の輪は美作が好きここかしこ

青田風

井口祥子

春眠のまどろみ破る鼠かな
一匹の毛虫もごもご道渡る
蜻蛉の目夕焼映して茜色
田の畔をめぐりし夫に青田風
蜘蛛の巣にかかりてまどう朝ぼらけ

大桜

春名静山

菖蒲葺く昔どの家も子沢山
長男の一と日戻りて耕せる
日除傘差して稲刈るコンバイン
村中の田に猪垣の電気柵
咲き出でし村の真中の大桜

四季折々

青山美和子

秋風を感じる朝に友は逝き
香りたつ垣の紅梅歩の緩む
青田風波打つ水面くじら雲
傘受けて青梅たたく老二人
凧に鐘も震える里の夕

うまし国

沖田はるみ

初茜里の真中へ千木の杜
名城の石積み高し春の月
夏霧あげ山健やかや美作路
芒原分かつ流れや美し国
切貼の花の真白き冬障子

四季

福嶋多斐子

テスト終へピアノの曲に春を聞く
花の青まだ開かぬに走り梅雨
笹添へて真白き皿の香魚かな
ひとひらの病葉土にかえる時
ゆつたりと柚子湯の外の静寂かな

昼の月

樽井清江

梅の香に誘われ見上ぐ昼の月
植林の陰に身を寄す春椎茸
天も地も菜の花色の風の中
旅に出て振る舞われたる新茶買う
梅干の皺集めたり笹の上

笑顔

香山秀子

ちちろ虫眠れぬ夜の子守唄
船頭の唄声運ぶ秋の風
ありがたし孫より宅配マフラかな
梅の香を乗せて列車は何処へ行く
看護師の朝の笑顔や春うらら

春

豊田絢子

春眠のうしろで笑ふ里の風
下駄履きて外湯めぐりや春浅し
春耕の丸き背中に日の匂ひ
野に遊ぶ足裏に上る命かな
歛握る手に柔らかき春の土

沙羅の花

下山紀子

手のひらに白の重さよ沙羅の花
今日の日を大事に生きて沙羅の花
濃紫陽花武蔵お通の像囲む
花栗の匂ふ野良着を脱ぎにけり
野良仕事終えて一服夏鶯

川柳

友との便り

森本久子

秋空に眞夏の夕日赤くさす
老いゆく年を忘れてえくほ顔
国道に出て来て猪ゆうゆうと
青空に光輝く土用ほし
友の名を旧でよんで笑声

哀愁

春名静山

粗末には出来ぬ棚田を守らねば
古里の川で泳いだ少年期
鉱石を運んだ鉄路にある哀愁
聞く耳を持たず若さが突走る
愛牛と別れ田を鋤く耕耘機

恐ろしや…

山下照夫

国民は初物喰いか様変り(参議院選挙)
後世に原発のつけ残すまじ
原発を皆無の夢は贅沢か
消費税上げて千兆減らせるや
オスプレイ増えるばかりで沖縄は

生きる

遠藤 栄

青い山山頭火の句口ずさむ
少女期をつめた鞆が捨てきれぬ
こんにちは過疎の村にも笑顔あり
同窓会皺の中から影拾う
畑仕事今日もできたと感謝する

折り返し

衣笠隼巳

巢立ちした部屋に一枚時間割
下り坂前を見つめてローギヤ
予定表過密ダイヤの医者通い
飲むほどに青くなるやつ赤信号
折り返し過ぎれば妻の歩に合わせ

笑顔

山本昌子

帰省して母の笑顔に愚痴言えず
花丸じゃないが笑顔の嫁がいる
いい人と言われ笑顔がくずせない
にぎやかに笑顔で集う趣味の会
腕よりも笑顔が人気村の医者

八十年

太田智子

アルバムに残る青春セピア色
青い空に抱かれて過疎に八十年
謎かけとも知らず気楽な老ひとり
折れた杖衝いても立つと寡婦の意地
今日生きた感謝でめくるカレンダー

諦観

原洋一

夢幻泡影やがてけだるき戯画の街
夢老死尽コップの中にうづくまる
一切衆生みんな仲間でみな他人
まだ夫婦才子佳人じゃないけれど
生老病死一切皆苦無際限

短歌



生花樽 井富美江

水の精

三浦智江子

イグアスの滝の絵を見て「これなに」と問ふゆゑ
この児に滝を見せむか
雨あがりの箕面の滝の音高し近づくほどにふみは
たちろぐ
滝しぶきの霧になりつつさみどりの山に踊るよふ
はりくるくる

夜の雨音

安東奈穂子

朝ごとに鳴きぬし小鳥の声もなく北風庭に音立て
て過ぐ
今日ひと日何することなく過ごし来てただ振り返
る坂の夕暮れ
大家族の賑やかなる日も遠く過ぎ今は我のみ夜の
雨音を聞く

生くることの喜び

丘野道子

臥す折に湧きし想ひも後に詠み時をし生くること
の喜び
美作に「智恵子」の恋ひし青空も見えぬて鳶が輪
を描くなり
妖精のドレスの様なる合歡の花を毛虫に例ふる夫
と暮すも

かたくりの花

春名静山

無縁墓廻りの草の刈られて供華の如くに彼岸花
咲く
若き日に歌いし歌詞の枯れすすき八十余年長らえ
て聞く
狭庭辺に山より移し馴染しか今年も咲けるかたくり
の花

老いの気儘

山下光子

今日も又よぼよぼの手に恙なく独りの独楽を回して過ぎぬ
老ゆる程少しはましにありたしと願うになおもつ
のる侘びしさ
己が身の醜さ今更棚に上げぼつぼつ叶う独り居なりけり

シルバーカー押す

加藤幸子

無人市に以前は売りし春大根一本買わんとシルバーカー押す
もがきつつ長虫一匹曳く蟻を塵敷きたきに止めて
目で追う
燻りいる葉書の束をほぐしやれば青きペン文字炎
に囲まる

廃校

福嶋多斐子

廃校に流るる曲は七つの子夕やけこやけ今日つづがなく
グラウンドは今静もりて子等の声影もなきまま草
萌ゆるのみ
残雪は融けやらぬまま何故か学舎の窓は暖かく見ゆ

一直線

岩本敏子

研水かへ鎌研ぐ手を止め見上ぐれば一直線に飛行
機雲伸ぶ
一つ穴におへそを下に種を置く黒豆はすなほに双
葉を並べぬ
「携帯」を忘れて出づれば一日が長く思はる今の
日常

人生訓

山下照夫

人の世に幸と不幸は両隣幸わせの刻を真逆忘れず
梅雨末期来たれば愛し女想い出さず黄泉に旅立ち何
処に参るや
杉坂に鴨のつがいは楽し気に我が故郷も和みてお
りぬ

旅先にて

豊田絢子

恵那山のトンネル抜くれば霧はれて眼下に映ゆる
山の紅葉よ
鉛色の海原に起ち寄する波怒濤となりて岩走りけ
り
城崎の外湯めぐりに下駄履けば我が幼日の姿重なる

野菊

杉本幸子(土居)

木犀の香り流るる帰り路山の向うに虹の立つ見ゆ
しき
憂いごと秘めて野径を行く吾の痛む心に野菊やさ
しき
彼岸墓地お供え狙う鳶鴉供えしばかりを素早く持
ち去る

青春回想

松本哲夫

久里浜の「電測校」の甲板掃除前へ押せ押せの怒
声に追はれき
「權用意」の号令かかりて勇む士気横須賀通信学
校カッター競技
「錨上げ」の命令下りていざ出航基地より出でて
南の海へと

史上初の大河川工事

加藤 芳英

吉野川は河幅倍化の大工事よ働く人の功を称へむ
山家川も河幅倍増で土手出来る「江見商」跡を市
役所に使へな
五メートルの護岸壁出来て「江見浄化センター」
も水害避けうる

村の初夏

山下 三代子

「秋田小町」の苗は列をばなしゆくか水田に田植
機の音響く朝
真珠とも見紛ふ真白き卵の花は初夏を告げをり山
路に咲きて
連休に都会より帰りし孫達は木々の緑に深呼吸す
る

卒寿の友よ

有 元 理嘉子

たづぬれば卒寿の友の笑みこぼる今日は草餅作り
て待ち呉れ
茸採りて山に遊びし若き日を言へば輝く卒寿の友
よ
友植えし藤の広がる宮山に紫の花よ永遠に咲き繼
げ

優しき人々

横山 美恵子

大いなる大根白菜どっかりと置かれてあるは隣家
の賜物
手押車を押しつつ登る私の背に手を添へ呉る友
の手温し
年老いて甥の優しさ身に沁みぬ思へば義姉の叱り
声聞かず

月と牛蛙

原田 順子

大聖寺の掃除しをれば蓮池に牛蛙鳴く威圧するが
に
「峨眉山月」吟じ終ふれば山の上に半輪の月霞み
て見えたり
蓮池に鳴く牛蛙の姿見むと小石投ぐれば防犯カメ
ラあり

夫

宿野 和穂

生きてゐて呉れさへすればと言ひし夫今はその立
場が逆になりたり
ドライブの好きな夫を誘ひ出す気分転換に喧嘩
しながら
老い夫とよろよろ歩いて大原の本陣跡を巡りてゐ
るなり

鯉 幟

新免 三代

孫生れて爺は鯉幟を揚げにけり裡には己の幟と思
ひてや
鯉幟を揚げながらに声聞こゆるは幼と爺かソプラ
ノとバス
海拔は四百米のわが里の空を一戸の鯉幟泳ぐ

母よ母

加百 由起子

理不尽なる仕打ちを怒れば母の喝「お天道さまは
お見通しだよ」と
「生き通しは出来ん」と介護の苦しみを労り呉れ
し母が呟く
百歳を越えてとの願ひ果てもなく施設に母の車い
す押す

穀雨

小林洋子

春雨は煙のごとくに降り過ぎて今日は「穀雨」ぞ
田仕事迫る
熟睡の出来ざりし夜と思へるに明けの雷鳴記憶に
あらず
一泊のクラス会にてそれぞれのバッグに保険証喜
寿のわれらは

変はる景色

黒石初江

手のひらを疲れし友の背に当てて静かに摩れば気
持良げなり
寒さにて枯れし鉢花植ゑ替へて戸口に置けばそこ
に春が来
真向ひに大き工場の建ち行くもかつてはそこで栗
を拾ひき

鹿

新田千晶

「電柵」をくぐり入りてはわが畑を荒らし菜を食
む数多の鹿よ
道中をライト照らせど避けもせず振り返り見ぬ子
を待つ親鹿
車止め鹿の一家が立ち去るを見届け我はその後進
む

母

松井洋子

古ミシンを粗大ごみにと出しをれば積み立てをせ
し亡き母が踵つ
着物をば四枚服に変へたれば笑ふや泣くやお墓の
母は
ご詠歌を習ひし母がご詠歌で送られし日を春日に
憶ふ

農ガール

末宗玲子

野菜作り始めて三度目の春迎ふまだ初心者の農ガ
ールです
啓蟄を十日も過ぎて這ひ出してチヨロチヨロチヨ
ロと畑を打つ我
ゐのこづち・をなもみ・めなもみ・ぬすびとはぎ
みんなみんな私の敵です

折々に

名部みどり

支柱も無く田道のひまはり太くして夕陽に一輪台
風去りて
桜や椿と共に育ちしメタセコイヤぬきいでて孤高
の姿くづさず
本堂の庭を吹きゆく春嵐御住持の素足に花の舞ひ
くる

山里

森本久子

秋山のところどころに立つ煙高き栖に人のゐるら
し
ねばりなくしろじろとして秋の雲峰の遠くへ消え
てゆきたり
青き葉のはざまに紅き寒椿粉雪降るに誇りもち咲
く



日本画 鶴石早苗

早春

井上 さかゑ

寒のさ中のまれなるひと日の暖かさ節分草の花の
またるる
水菜をばさげ来し友が地下足袋につきし春泥落し
て去にけり
たんぽぽに早咲いたかとささやきて添ふるその手
に北風走る

やさしく問ふも

池田 保子

重篤なる病名告げし内科医は「やりたきことは」
とやさしく問ふも
我にのみ奇跡はあらずや病巢をぢつと見つむるパ
ソコン画像
新緑の大地に歩を止め息吸へば今の我には望むこ
と無し

朝

藤川 亜也

一人寝の窓の外より「もう朝よ」と昨日と違ふ鳥
の声する
幸せは寝て起き歩き庭に立ち木犀の薫り匂ひ来る
時
毎朝の窓より入り来る空気のうちまき今日も生きる
と手足を伸ばす

夏の山山

安西 苑

畑を打つ手をし休めて山見れば花は散り果て葉桜
となる
夏山は青あを青に包まれて奥処に聞こゆる松蟬の
声
野辺を吹く夕風ありて身をおけば昼の暑さの遠の
きゆくか

命ありて

原 幸子

玉葱を五個づつ括りて吊しゆく六十連は一年の糧
夫は山冬の仕事と樵きりをす案じながらも家にて待つ
のみ
八十路にて逝きにし母よその年に我がなれるを那
岐山に告ぐ

脳活とせむ

大内 佐智

大寒に歌を習ひに我は行く「惚け防止」にと背中
押されて
時折に世間話も出でながらちぎり絵ぼつぼつ完成
しゆく
山畑が戦場なりと我鼓舞す少し無理して「脳活」
とせむ

淡路島へ

名部 通子

トンネルを抜ければバツと青い海白い橋脚明石海
峡大橋渡る
白牡丹とも言ふらしき鱧料理しばし見惚れぬ器に
咲くを
炎天下を歩みて乗れる観潮船に暑さ忘るる鳴門の
渦よ

生きてあれば

清田 三智子

春の足音近づきくれどたちまちに冬に戻るか足音
もなく
田を見れば稲穂がそろひて得意げに風にゆれをり
熱中症にもならず
注文する三年日記よ最後まで書ける事をばふと案
じつつ

曾孫

光井 房子

希望胸に一年生になりし曾孫のランドセル姿に夢をまがくも

「朝ドラの梅ちゃん先生」主題歌を六歳が歌へば口ずさむ三歳

曾孫二歳言葉は出ねど人の言ふこと理解するも幼児の知恵

折々に

藤本 伸子

夫逝きて独り暮しの叔母なれば日が一日の言はぬ日あり

青き色好みて買ひし車なれど乗り手なくては泪のもとか

世の中は愛と情で生きられて夫と別れては片道切符

平凡

内藤 慶子

平凡なる日々の生活ありがたし平凡こそが有り難きこと

よく食べて笑ひ歩けば人生の夕暮れもまた陽を眺められむ

古稀迎へこれから先は誰からも愛され好かるる祖母婆婆にと

春闘

福島 美智子

にはたづみに鈍色の雲流れゆく時折鳥の影を宿らせ

キヤベツ食ふ鴨のこゑ春闘の如くに畑をおほひ尽しぬ

雨音は次第にとほのき降る雪に山の獣の身震ひする音

生きよ

浜田 くに子

白と花咲き花は散るばかり生きよ生きよと祈るほかなし

父が逝き兄が逝き君も逝かむとす残る古い母思へよ生きよ

過去を悔やむな先を思ふな今だけをしっかりと生きよと泣く甥に言ふ

天空の城

入矢 敏江

天空の城とぞ聞きてそそらるる竹田城跡を見むと出で来つ

天守台南千畳北千畳花屋敷あり天空の城

ぜんざいを食べむと入りぬ「町屋カフェ寺子屋」は暗き明治の古民家

春を待つ

日下 智加枝

那岐の峰をくろく覆へる厚雲が覚悟をしると冬を告げをり

いつまでも咲いて散らない冬の薔薇よ恰好悪くは終りたくない

春を待つ心のやうにふくらんでパンジーが咲く寒もゆるんで

祖父知らず

黒石 登代

亡き夫に似て来る男孫は祖父知らず私がひとり北叟笑むなり

福島の紅葉の山々写せども放射能をば含むは写らず

葉煙草の乾燥機具を捨て値にて息子は売り渡す屑鉄業者にて

水の囁き

中川 富美枝

谷水を受くる棚田に近づけば水音きこゆ囁くやうに

上着一枚岸辺に脱ぎて蓬摘む媪が見ゆるわが里の午後

水道の垂るる蛇口を締め直し古い重ねゆくわが手を撫づる

遠い記憶

北村 和子

久々に通る鳥取への道は夫の記憶を刺激するらし

鳥取の賀露の宿より海を見つつ遠い記憶を手繰り寄せをり

浦富の海辺に寄せては返す波眺めて倦かぬ山国の我

浜に遊びて

長澤 和枝

丹後路へ来たりしわれら「大浜」の広き海みる寄する波みる

たはむれに「神島外浦」の浜の水を両手にすくひてこぼしてみたり

新婚の旅にて遊びし「高師の浜」五十年前も今日も松風

家族の幸

角南 三津糸

一人子で育ちし我の人生に子あり孫あり曾孫も生れたり

夫を得て二人子を得て孫五人得たりて曾孫も一人を得たり

月仰ぐ親無く夫無き独り身が離れ住む子孫に生かされをりぬ

夫

角 利津

新しい空気を求めて声ヶ虬に空気のやうな夫を誘ふ

おたがひに物忘れは多くなりたれど毎日米は三合を研ぐ

夫より一日も長く生きたしと思へどあやふし夫は耳聾ふ

ふる里よ

阿部 すみゑ

焼け跡に残りし土蔵よ病む母と暮らしし我を語るねど知る

残りぬし土蔵も失せて生まれ家の思ひ出すべて失ひにけり

われ生れて八十余年を住みをりぬ何処にか住まむと思ふことなく

今日の一日

加藤 保子

朝まだき霞める彼方を白鷺の悠然と飛ぶ使者のごとくに

夜もすがら降り続きたる雨上がりごろう山を霧這ひ上りをり

落日の観音山をほのか染め事なく今日の一日が暮るる

旅

船曳 文子

真下よりスカイツリーを真つ直ぐに見上げて吾は九十歳となる

今日は西明日は東と旅したり踵の痛みは誰にも言はず

万葉の歌びと真似て楽浪を眺めつ吾も一首詠まむか

われ老いにけり

坂井 はつ子

「ままごと」の亭主が又も逝きにけり「ひさしちやん」が逝き「敬ちゃん」が逝く
ままごとに拵ぐる庭の高低に横座かか座の自づからありき
侘助の花の刺身に柿の皮干し芋並べて酒盛りをしき

有ると思ふなど

関内 惇

あの世への準備は何もせざるまま約しし仕事に追はれてをりぬ
今日も又いつもの通りに終はりたりいつもの通りに成ると決めぬて
わが胸を夕日が刺して沈みけりいつまでも「時」が有ると思ふなど

身のめぐりに

森 佳奈

紫陽花の参道降りて見返れば夕闇迫りし寺に一灯
この夏も東北祭りに行かれぬと呟くこの身にざんざ降りする
木の影にわつと湧くごと庭藤の紅き花ばな真昼を驕る



油絵 小林道幸

グループ活動

グループ活動

それは

作東文化の

底力



書道 北村石舟

コール作東

指導者 池田 直美
会員 二十三名

芸能部「コール作東」は、昭和六十年、作東町婦人会コーラス部として設立し、難波康江先生・野口仁実先生のご指導をいただき、「岡山県婦人コーラス発表会」に十九回出場しました。その体験からコーラスの実力を少しずつ身につけてきたように思います。

早いもので「コール作東」を設立してから二十八年を迎えました。

また、平成十七年から作東町芸能部に入会し、今日に至っています。今日の指導者は池田直美先生です。

設立当時五十歳代だった会員も、今は七十歳代、八十歳代になりましたが、歌声は、より一層磨きがかかっ

ています。ちょっと褒めすぎでしょうか。

現在、会員は十歳代から八十歳代と年齢の幅も広く、男性の入会もあり、それぞれの良さを認め合いながら歌っています。

私たちはこれからも、コーラスの素晴らしさ、楽しさ、歌う喜び、快さを味わいながら、仲間とのコミュニケーションを大切に歌い続けていきたいと思います。



私たちの仲間に入りませんか。いつでも入会できます。また、男の方の入会も大歓迎です。

双山囲碁クラブ

双山囲碁クラブは、発足して四十一年になります。発足当時は粟井地区内の在住者、または勤務者をもって構成していましたが、愛好者が連れを誘い合っている中に、作東地域全域からそれ以外にも輪が拡がり、五十名程度になりました。さらに、美作市が誕生して美作市囲碁連盟を立ち上げ、百三十名程度のグループとなりました。平成十年頃までは、双山囲碁大会と作東町囲碁大会が開催されていましたが、諸般の事情により町内では双山囲碁大会のみとなりました。

一年に三回の大会を開催しており、節目の大会（九十回、百回、百十回、

百二十回）には、関西棋院のプロ棋士を招聘して対局をしました。格調高い大会として評判になっています。

双山囲碁クラブの名称は、万葉集に詠まれた能登香山（粟井地区のシンボル、通称双子山）からきたものです。

課題は、囲碁愛好者の高齢化が進む傍ら、若い人の愛好者が増えないことから囲碁人口が減る一方です。

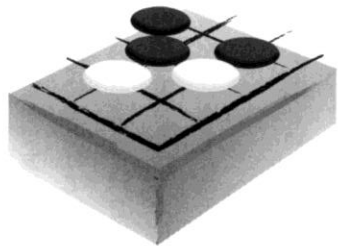
振興策として美作市囲碁連盟は、教育委員会が主催する子ども囲碁教室に十名の講師を派遣しております。

会場は美作市市民センター、作東公民館、大原公民館等です。因みに今年の生徒は二十七名です。毎年送り出

しているこの子たちが、後継者となってくれることを期待しているところです。

一方、平素、囲碁を楽しむ場所がないことから、囲碁連盟が中心となって、美作公民館で「囲碁サロン天元」を立ち上げ、毎日（日、祭日は除く）午後から対局できることにしました。

囲碁は奥の深いゲームで、頭の体操にもなります。囲碁を始めた方、初心者の方も歓迎します。



平成24年度 作東文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
24	3	25	作東文化協会総会	作東バレンタインプラザ
	4	23	第1回理事会	事業計画・会員募集・研修旅行・文化誌編集委員会について
	5	1	文化誌編集委員会	編集委員長選任・編集方針について
	5	25	第2回理事会	研修旅行・文化誌原稿募集・秋の文化展について
	5		会員募集開始	会員募集
	7	1	研修旅行	大塚国際美術館
	9	1	第3回理事会	秋の文化展について
	10		文化誌38号発行	全会員に配布
	10	27	秋の文化展	B & G 海洋センター(～28日)
25	1	25	第4回理事会	春の文化展・芸能発表会・総会について
	3	8	第5回理事会	総会について
	3	23	春の文化展	改善センター・美術館・プラザ・芸能発表会・H25年度総会(～24日)

【支部活動】

部名	年	月	日	内容
江見・豊野支部	24	6	6	江見・豊野合同支部評議員会
		10	10	江見・豊野合同研修旅行(神話博しまね等の見学)
福山支部	24	10	29	研修旅行(鳥取・兵庫方面)
		11		評議員会
粟井支部	24	6	5	評議員会
		10	6	春日歌舞伎公演 ～7日
		10	23	評議員会
		11	25	研修旅行(神戸バイクルーズとハーブ園)
	25	1	31	支部活動助成金配布(サークル別)
土居支部	24	6		評議員会
吉野支部	24	6	15	評議員会
		10		評議員会
		11		研修旅行
		25	2	評議員会

作東吟詠愛好会

光辻 猛美

作東吟詠愛好会は、平成二年当時旧作東町文化協会芸能部長の(故)香山勇作氏が「一度、作東町の詩吟が好きな人が集まって発表会をしたらどうか」と呼びかけられて、(故)香山勇作氏・(故)多胡正氏を代表者として発足いたしました。

最初の発表会は、「早渕流詩舞の会」との合同で出場者百名近くとなり、十年間開催してまいりましたが、現在、発表会は中止していて、美作市作東地区文化協会に登録をしています。

会員は三十名程度で、(江見・土居・竹田・粟井・吉野)各地区に教室があり、練習会は月に二回、活動と

しては、作東地区芸能発表会・紫流岡山本部吟詠大会(一年二回)・岡山県文化祭吟剣詩舞道大会などがあります。

「詩吟は難しい」と、よく言われますが、それほど難しくはありません。音楽に合わせて歌わなくてもよいので誰にでもできます。詩を一節一節、先生の真似をして自分の声で節を付けて詠めばよいのです。

「詩吟を習ってみたいな」と思われる方はいつでもお申し込みください。待っています。

私達は、丹田から声を出して詩吟をすることで腹筋を鍛え、大きな声を出すことでストレスを解消し、多

くの人と交わることで友達もたくさんできて、健康につながっています。

また、中国の有名な詩人、日本の歴史に残る人物の漢詩を詠んで作者を知り、作者の心にふれることができます。

「漢詩を吟ずる」という日本の伝統文化を学び、次の世代へ伝えていくことも大事なことだと思っています。

57回 岡山県吟剣詩舞道大会



【専門部活動・1】

部名	年	月	日	内 容
書道部	24	9		白雲書道会/白雲書道会展(作東美術館) 9月6日~9日
絵画部				さつき会/日本画教室 月2回開催
	24	3		玄美会展 22日~25日
		7		倉敷院展
		10	27	淡雪会日本画展
	25	2		さつき会日本画展(作東美術館) 21日~24日
				作東絵画教室/油彩画教室 月2回開催
	24	3	24	春の書画展出品
		5	6	春の絵画展開催(作東美術館)
		6	5	板井原スケッチ展開催
		8	25	県展出品
		10	19	しんわ展出品
		10	20	バレンタイン愛の美術展出品
		11	2	勝山いとこみつけた展出品
				作東絵画教室/水彩画教室 月1回開催
	24	3	24	春の書画展出品
		5	6	春の絵画展開催
		6	5	板井原スケッチ展開催
	24	9		油彩こぶしの会展示会(作東美術館) 12日~15日
茶華道部	24			ひまわりの会/研修 月2回開催
		9	30	茶の湯同好会/お月見茶会
	25	1	6	初釜
写真部				定例会 月4回(作東公民館)
	24	5		春景撮影会(鳥取大山) 5月・6月
		6		鏡野町・牛林の滝撮影会
		8		バレンタインプラザ展示
		11		佐用郡展出品・秋景撮影会(福地溪谷) ~12月
工芸部	25			むつみ会/月2回開催
				江見ちぎり絵教室/年11回開催
				福山ちぎり絵教室/年10回開催
芸能部	24	12		交流会
				吉野ハピネス(岡田香真流大正琴)/月2~3回
				J Aあずさの会(琴伝流大正琴)/月2~3回
				早渕流剣詩舞道/月3回
				菊水流剣詩舞道/月2~3回
				若柳流日本舞踊/月2~3回
				藤間流日本舞踊/月2~3回
				コール作東/月2~3回
				作東吟詠愛好会/月2~3回
	24	5	8	第1回芸能部役員会
		12	5	第2回芸能部役員会
25	2	1	第3回芸能部役員会	
	3	24	第8回作東文化協会 芸能発表会	

【専門部活動・2】

部名	年	月	日	内 容
情報映像部				パソコン講座/毎月第1火曜日開催・H.P(ブログ含)随時更新
歴史部				歴史地名研究会/定例会開催(原則第4火曜日開催)
				古文書を読む会/毎月1回(作東総合支所会議室)
文芸部	24			川柳/偶数月第2水曜日例会・新聞発表
				山家川俳句会/各月の最終土曜日・定例会
				英北短歌会/定例詠草会 月1回(原則第2木曜日開催)・作品鑑賞
				能登香短歌会/定例詠草会 月1回(原則第4金曜日開催)
園芸部				吉野短歌会/定例詠草会 月1回(原則第1水曜日開催)
		3		春 技術講習会(講師:白鷺園主指導)湯郷文化センター
		10		秋 技術講習会(講師:白鷺園主指導)
手芸部				先進地見学(京都大観展)
				先進地見学(彦根盆梅展)
	24			手編み教室 月4回開催(作東公民館)
棋道部				ビーズ教室 月1回開催(作東公民館)
				切り絵教室 月2回開催(妹尾さと子宅)
	24	1	29	第116回双山囲碁大会
		4	22	第117回双山囲碁大会
	8	26	第118回双山囲碁大会	
	25	1	27	第119回双山囲碁大会

【連盟事業】

年	月	日	事業名	会場
24	4	22	第4回美作市日本舞踊連盟発表会	美作文化センター
	6	17	第5回芸能発表会	東粟倉基幹集落センター
	10	21	第6回美作市吟剣詩舞道連盟発表会	東粟倉基幹集落センター
	6	24	第10回美作市囲碁大会	
	11	11	第11回美作市囲碁大会	
			囲碁サロン「天元」	林野公民館

作東文化協会 グループ紹介

部名	グループ名	種別	代表者名	指導者名	例会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員		作東文化協会未加入者	合 計
								作東地区内	作東地区外		
書道部	1 白雲書道会	書道	北村福作	里見明	月2~3回	作東公民館 林野教室 湯郷教室	白雲書道会展	22	15	2	39
	2 書・春名	書道	春名直子	春名直子	月3回	角南公会堂 高本公民館 西町コミュニティ		4	1		5
	3 阿部書道会	書道	真野みよ子	阿部雲魚	月1回	岡山市北区伊島町阿部雲魚宅	県北展等	4			4
絵画部	4 作東水彩画教室	水彩画	小林道幸	竹中信清	月1回	作東農村環境改善センター	春の絵画展・スケッチ展	8	6		14
	5 作東油彩画教室	油彩画	小林道幸	竹中信清	月2回	作東農村環境改善センター	春の絵画展・スケッチ展	7	5	3	15
	6 さつき会	日本画	寺師喜代美	井上美智江	月2回	アトリエ華	作東美術館で作品展	9	4		13
	7 土居すみ絵	墨絵	小林艶子	岩本敏子	月2回	J A勝英作東支店土居営業所		7			7
	8 彩の会	絵手紙	木南節子		年6回	個人宅	吉野郵便局・さんちゃい館・作東老人保健施設	4			4
	9 すみれ会(絵手紙)	絵手紙	岩本敏子	岩本敏子	月1回	岩本先生宅	春・秋展示会・プラザ東側展示	7	1		8
	10 こぶしの会	油彩画	田中佳栄子	権田直良	月2回	勝英農協作東支店会議室	グループ展・課外学習・写生会(年2回)	8	2		10
園芸部	11 盆栽	盆栽	青山巖	白鷺園主	年2回	文化センター	文化センター	4	3		7
茶華道部	12 ひまわりの会	華道	中田敏子	中田敏甫	月2回	作東公民館		10			10
	13 茶の湯同好会	茶道	谷本津多江	谷本津多江	月4回	作東公民館	お月見茶会・新年茶会	10			10
文芸部	14 英北短歌会	短歌	横山猛	関内惇	月1回	作東公民館	プラザ展示 2回・新聞発表 月1回 文芸愛の小径短歌大会 年1回	16	8		24
	15 能登香短歌会	短歌	松井洋子	関内惇	月1回	粟井教育集会所	プラザ展示・山陽新聞発表(隔月 年6回)	16			16
	16 吉野短歌会	短歌	新免三代	関内惇	月1回	吉野公民館	ペイネ・山陽新聞社	12	1		13
	17 山家川俳句会	俳句	山本登	春名はるを	月1回	福山地区福祉センター		15		1	16
	18 作東川柳同好会	川柳	原洋一	原洋一	月1回	作東総合支所第1会議室		15			15

作 東 文 化 協 会 グ ル ー プ 紹 介

部 名	グループ名	種 別	代 表 者 名	指 導 者 名	例 会	場 所	展 示 会 等	作東文化協会会員			合 計
								作東地区内 人	作東地区外 人	協会未加入者 人	
歴 史 部	19 歴史地名研究会	地名研究	新 田 祐 之	固定した指導者は、なし。地域の高齢者又は郷土史家	月 1 回	作東公民館他 地域の集会所	展示活動は行わず	17	5		22
	20 古文書を読む会	古 文 書	真 野 みよ子	安 東 靖 雄	月 1 回	作東総合支所第1会議室		8	2		10
写 真 部	21 写真同好会 写友	写 真	小坂田 貢	小 玉 司	年1～2回	撮影会(野外) 写真のこだま	プラザ展示・佐用美術展出展	10	1		11
芸 能 部	22 吉野ハピネス	大正琴	小 林 美農里	富 永 仁 美	月 2 回	吉野公民館	岡田香真流大正琴津山会大正琴発表会	12	3		15
	23 琴伝流大正琴あずさの会	大正琴	岩 本 敏 子	藤 谷 守	月 1 回	J A 勝英本店	全国大会・各地のイベント参加 福祉施設へのボランティア	6	4		10
	24 舞 の 会	剣 舞 日本舞踊	石 川 八千代	安原鯉舟・渡辺南征 若柳吉宏恵・藤間峯由	年2～4回			10	2	2	14
	25 作東吟詠愛好会	詩 吟	光 辻 猛 美	光 辻 猛 美	月 2 回			29			29
	26 コール作東	コーラス	山 本 文 子	池 田 直 美	月 2 回	作東公民館		23	1		24
工 芸 部	27 江見ちぎり絵教室	ちぎり絵	末 宗 順 子	杉 本 幸 子	月 1 回	作東公民館		6	1		7
	28 福山ちぎり絵教室	ちぎり絵	香 山 満寿子	杉 本 幸 子	月 1 回	福山地区センター	山の学校ロビーに展示	7			7
	29 江見陶芸部	陶 芸	中 川 幹	田 代 宗 保	月 1 回	作東公民館		9			9
	30 が ん び の 会	ちぎり絵	名 部 竹 夫	名 部 竹 夫	年10回	粟井教育集会所 藤生・川崎・江見個人宅		20			20
	31 む つ み 会	押 絵 ちぎり絵	山 本 津多江	山 本 津多江	月 2 回	白水横林 原コミュニティ		12			12
棋 道 部	32 双山囲碁クラブ	囲 碁	横 山 廣 志	横 山 廣 志	年 3 回	作東老人福祉センター		29	101	101	231
情 報 映 像 部	33 お達者ねっと倶楽部	インターネット	鳥 形 初 美		月 1 回	粟井地区センター WEB上		10			10
手 芸 部	34 編物手芸教室	手あみ 各種手芸	妹 尾 さと子	妹 尾 さと子	月 4 回	作東公民館 船曳文字宅		18			18
	35 ビーズを楽しむ会	手 芸	妹 尾 さと子	西 坂 暁 子	月 1 回	作東公民館		14			14

418人 166人 109人 693人

編集後記

『作東の文化』第三十九号が会員多数の方々からのご投稿と特別寄稿により今年も発刊できましたことに、編集委員会一同、感謝いたしております。

今号の特別寄稿として当文化協会の顧問としてご支援とご指導をいただいております里見明氏と上福原出身で朝日新聞岡山柳檀選者としてご活躍の岡田千茶氏より玉稿をいただきました。厚くお礼申し上げます。

また、グループ紹介では、コーラスグループの「コール作東」と「双山囲碁クラブ」並びに「作東吟詠愛好会」の三グループを紹介しております。それぞれのグループの活動の様子が紹介されておりますので、興味のある活動がございましたら、お問い合わせくださいませよう、お勧めいたします。

短文芸では、ここ数年、詩のご投稿がなく、不掲載が続いていましたが、今号は、二名の方の作品を載せています。続けてのご投稿をお待ちしております。また、俳句、短歌、川柳にも多数のご投稿をいただきましたことにお礼を申し上げます。

カット写真も各部より出していただいた十三点を紹介しておりますが、白黒写真のため、作品の本質が伝わらないことをお詫び申し上げます。

来年は、第四十号の記念号になり、内容もより充実したものになるよう計画されると思いますので、今から各種作品を制作くださいますと多数のご投稿を期待しております。

編集委員会

作 東 の 文 化

第 39 号

平成25年10月1日発行

編 集 作東文化協会文化誌編集委員会
(美作市教育委員会 社会教育課)
編集委員 安東 靖雄 梅澤 紀之 小林 秀雄
谷口 重人 新田 祐之 原 洋一
真野みよ子
発行所 作 東 文 化 協 会
岡山県美作市教育委員会 社会教育課
TEL (0868) 72-2900 〒709-4292
HPアドレス <http://bunka.bo.jp/>
印刷所 株式会社 廣 陽 本 社
岡山県津山市田町22